



巻頭エッセイ

平時から機能する なでしこBC連携

湯浅 恭史

筆者は組織のBC（事業継続）と危機管理を専門に研究しており、地域での防災活動やBCの取り組みへの支援等も行っている。

本稿では徳島県内外の建設業者等による、BCの観点からの企業間連携によって地域防災力や事業継続力を高めるだけでなく、平時から機能する取り組みを進めている「なでしこBC連携」を紹介したい。

雪害対応で誕生したなでしこBC連携

2014年12月に徳島県西部に想定外とも言える大雪が降り、被災地域にある建設業の株式会社井上組・井上社長は、休みなく雪害対応にあたる社員が疲弊していくのを目の当たりにし、被災地域の建設業者だけの災害復旧活動に限界を感じた。

策定していた南海トラフ巨大地震対策のBCPは機能せず、災害時にも経営資源を確保し、自社の事業継続力を高めるためには建設業者同士の連携が有効な選択肢となり得ることを実感したことから、以前より親交のあった株式会社福井組と2社による連携に取り組むことを決めた。

まずはお互いの地域特性や業務内容の相互理解を高めるため、工事現場への訪問を行うことを決め、これまで現場業務の社内点検として行っていた女性社員による「なでしこパトロール」を互いの工事現場で実施することとなった。

他社の社員が現場でのパトロールを行い、改善点について意見交換をすることは珍しく、社内外から反響のある取り組みとなったことから、この「なでしこパトロール」を中心に連携

が進められることになり、筆者らはこれを「なでしこBC連携」と名付けた。

県外へのなでしこBC連携の広がり

その後、徳島県南部の株式会社大竹組を加え、3社での災害時の対応体制をより実効性あるものとするための実動訓練を実施するとともに、各社のBCP見直しにも取り組みはじめた。その一環で岡山県内で開催されたBCP研修会に参加したことがきっかけで、岡山県内の建設業者とのつながりができ、岡山県での「なでしこパトロール」が開催された。

特定非営利活動法人事業継続推進機構のBCAOアワード2015で「なでしこBC連携」の取り組みが表彰された際に、岡山県の建設業者も同様に表彰されており、互いの取り組みに感銘を受け、正式に連携に参加することになった。

現在では、徳島県、岡山県、高知県、和歌山県の18社が参加する連携となり、「なでしこパトロール」だけではなく、ICT土工等の先進技術の勉強会、テーマごとに分科会を設けた意見交換など、活動内容に広がりを見せています。ウェブサイトやFacebookページの運用、オンラインでの「なでしこパトロール」など、コロナ禍でも工夫を凝らした活動を継続しており、女性が活躍する建設業での取り組みとして注目を集めている。

発展の秘訣は、平時から機能する連携

「なでしこBC連携」は災害時の事業継続力を高めるための取り組みだが、平時からも大きな効果がある。各社は、「なでしこパトロール」によって同業他社の現場での工夫を実地で学ぶことができ、ベンチマーキングして社内にフィードバックしている。メンバーのひとりからは、「他社の社員と交流し、BCに取り組むことで意識の変化があり、経営視点で仕事を考えられるようになった」との意見もあり、人材育成にもつながっていることがわかる。

また、建設業界での女性活躍という社会的なニーズを満たしており、人材確保、育成という経営課題解決にもつながっている。

このように災害時だけではなく、平時からも機能する連携として、その効果を実感できているからこそ継続し、発展し続けている。このような取り組みが他の地域や業界にも広がっていくことを期待したい。

湯浅恭史（徳島大学環境防災研究センター）

参考：

なでしこ BC 連携ウェブサイト

<https://nadeshikobc.com/>



BCAO アワード 2017 事業継続部門 大賞

株式会社北岡組・なでしこ連携「女性目線を活用した BC 連携」

https://nadeshikobc.com/wp-content/uploads/2018/12/bcaonews_2018_1227.pdf



ジャパン・レジリエンス・アワード(強靱化大賞)2019

最優秀レジリエンス賞 受賞

なでしこ BC 連携「女性目線を活用した中小建設業者の強靱化～なでしこ BC 連携～」

https://nadeshikobc.com/wp-content/uploads/2019/03/resilience_2019_0315.pdf



日常にありながら災害時を意識する レジリエンスとグラデーション

はじめに

最近災害が増えている感覚はありませんか？

気候変動の影響により記録的な大雨が頻発しています。その被害はより深刻化しており、さらに全国同時多発で発生、そこへ令和 2 年初頭から全世界に猛威を振るっている新型コロナウイルスが上乗せされ、さながら広域複合災害のようです。

本稿では、極端な社会環境の変化に柔軟に適応可能な社会に必要な視点としてグラデーションについて考えたいと思います。グラデーションとは、濃淡や明暗、色調であり、連続的に段階的に変化していく状況を指します。以下の 2 つのグラデーションについて考察してみました。

- ① 平時と災害時、日常と非日常のグラデーション
- ② プライバシーのグラデーション

Ⅰ. 日常と非日常のグラデーション

(1) 豪雨災害の教訓から共同住宅の整備

平成 30 年 7 月豪雨災害被災地である倉敷市では、最大浸水深が 5m を超え、同市真備町では町全体面積の約 3 割が浸水、51 名が犠牲となりました。

災害発生後、被害の実態を調査してみると、行政からの避難勧告が発令された時点で多くの方が避難されていた一方で、51 名の方が犠牲となりました。そして、その多くはおひと

りでは避難が難しい方でした。

小規模多機能事業所「ぶどうの家まび」の代表、津田由紀子さんのご利用者さんもその一人です。

難聴を抱えた独居の 80 代女性は、避難の段階でご近所さんから声をかけられていたものの、気づくことができず自宅で命を落とすことになりました。

もし、いつも通いなれた憩いの場が身近にあり、そこに避難できる設備であれば。その場所が普段は地域の交流スペースとして多様な世代が集まり、楽しい記憶が生まれる場所であれば、自然と避難そのものの心理的・物理的障害がなくなるはずです。

この考えが「サツキ PROJECT」の柱となり取り組みがスタートしました。被災したアパートを地域の防災拠点の避難機能付き共同住宅としてよみがえらせたのです。

アパート全 8 戸の内、2 階の 1 戸をコミュニティルーム兼地域の防災拠点として開放する。ここには、地上から車椅子でも直接アクセス可能なスロープを設置しました（図-1）。

入居者は、支えあう生活や災害時には自宅が避難所となる可能性があることを理解して入居できる方を条件とし、若者からお年寄りまで多様な世帯が居住しています 1)。

2 階のベランダまでスロープにリフォーム。
近所の逃げ遅れた方へ安全のおすそ分け



コミュニティルーム兼地区の防災拠点



図-1 避難機能付き共同住宅

（２）日常と非日常をつなぐ拠点

このアパートは、平常時は住宅として、災害警戒時には避難先としての機能を有しています。アパートに据え付けられたスロープは、階段の昇降が困難な利用者へのアクセスを可能とするとともに、災害警戒時にも避難経路として活用されます。

また、周辺からの視認性が高いことから平成 30 年 7 月豪雨災害の浸水の記憶を継承し、**このスロープの高さ以上に避難しなければならない**という、高台または垂直避難を警鐘するシンボルとしての機能をも有しています。言い換えれば、日常空間にありながら、非日常を想起させる効果があるのです。

このアパートは自然災害による社会環境の変化に応じてその機能を住宅から避難空間に転用可能です。まさに**日常と非日常をつなぐグラデーションの役割**があり、グラデーションの彩りそのものとして機能しています。

立地場所は平成 30 年 7 月豪雨災害で浸水した場所であり、今後も浸水が想定される場所です。現在ではこのアパートが拠点となり、地域の子どもたちが防災について学ぶイベントや健康体操等が催され、コロナ禍にありながら小さなつながりを紡いでいます。

２．プライバシーのグラデーション

（１）要配慮者マイ・タイムラインの共同作成

このアパートの周辺地域では、要配慮者の避難を支援する支え合いの可視化が始まっています。**災害時の行動を時系列で整理する「マイ・タイムライン」を要配慮者と支援者により共同で作成**することで、確実な早期避難の実現を目指すものです。

地域の福祉事業者が中心となり、要配慮者マイ・タイムライン（図-2）の作成を推進するとともに、これを活用した避難訓練を地域住民と連携して実施しています。

要配慮者マイ・タイムラインは、本人、家族、近所、事業者といった 4 つの属性が警戒レベルに応じてどのような行動をとるのかを可視化（図-3）、共有するツールです。作成する過程で関係者が顔見知りとなり、連絡先の交換を通じてつながりの質を高める効果も得られます。



図-2：要配慮者マイ・タイムラインと作成ヒント集

出典：倉敷市ホームページ

令和 3 年 5 月の災害対策基本法改正により、全国的に避難行動要支援者を対象とした個別避難計画の取り組みが進められています。この取り組みは、町内会等の共助の機能発揮が期待されている一方で、いわゆる助ける側である支援者の確保が難しく、その進展は容易ではないのが現状です。

誰かが誰かを助けるのではなく、地域の総力戦、チーム力で「安全な避難」を勝ち取る。そのためには、全てのチーム構成員が何らかの役割を担わなければならない。では、要配慮者が担う役割にはどのようなものがあるのでしょうか。

～ 要配慮者が地域をつなぐ ～

要配慮者は周囲に早期避難と事前準備の必要性について警鐘を鳴らす存在と考えられます。そして、要配慮者マイ・タイムラインの作成を通じて、要配慮者を中心に様々な関係者がつながり、お互いの状況を気にかけて合うことで質の高いつながりを構築されるのではないのでしょうか。

助けられる側も助けられやすい環境づくりに日頃から取り組むことも必要でしょう。屋外避難が必要なのであれば、住居の入り口周辺は整然とし、地震等の揺れによって避難経路がふさがれることのないようにしておくことも重要です。

このような視点で避難をとらえてみると、これまでとは違った可能性が見えてくるのではと期待されます。

マイ・タイムライン（個別避難計画）				作成日： 年 月 日
ふりがな 本人(氏名):	家族		近所	
住所:	ふりがな 氏名:	関係: 携帯: (- -)	ふりがな 氏名:	関係: 携帯: (- -)
携帯:(- -)	ふりがな 氏名:	関係: 携帯: (- -)	ふりがな 氏名:	関係: 携帯: (- -)
いつもいる場所(昼 夜) 避難リュックの置き場所()	ふりがな 氏名:	関係: 携帯: (- -)	ふりがな 氏名:	関係: 携帯: (- -)
☐ 一人暮らし ☐ 高齢者世帯 ☐ 障害 ☐ 小学生以下 ☐ その他()	ふりがな 氏名:	関係: 携帯: (- -)	ふりがな 氏名:	関係: 携帯: (- -)
自宅の危険性 ☐ 浸水 ☐ 土砂 ☐ 地震	ふりがな 氏名:	関係: 携帯: (- -)	ふりがな 氏名:	関係: 携帯: (- -)
5 ~ 3 日前	☐ テレビなどで大雨の情報を知る	☐ 大雨情報を伝える	☐ 大雨情報を伝える	☐ 避難可能場所の把握・共有
	☐ 薬を余分にもらっておく	☐ 薬を確認する	☐ 薬の準備の声かけ	(L3以前)
	☐ 持ち物の確認	☐ 持ち物の確認	☐ 持ち物準備の声かけ	(L3以降)
	☐ 買い出し	☐ 買い出し	☐ 買い出し	
	☐ 避難先の確認・連絡	☐ 避難先の確認・連絡	☐ 避難先の確認・連絡	
2 日前	☐ いつ避難するか相談 相談する人()	☐ 避難準備の声かけ(再確認)	☐ 避難準備の声かけ(再確認)	
1 日前	☐ 家族・近所と避難準備状況を確認	☐ 準備状況の確認	☐ 準備状況の確認	☐ 避難準備の声かけ(再確認)
	☐ 避難先を決める	☐ 要支援者の避難先を決める	☐ 要支援者の避難先を決める	
	候補 { ・ ・ ・	☐ 自らの避難準備	☐ 自らの避難準備	
避難スイッチ（ L3 もしくは ）				
4 時間 前	☐ 避難の希望を介助者に伝える	☐ 避難の声かけ	☐ 避難の声かけ	
	☐ 貴重品の準備	☐ 貴重品の準備		
		☐ 車の準備	☐ 車の準備(担当:)	
	☐ 荷物を持って玄関で援助を待つ (居室から玄関まで 分)	☐ 避難開始	☐ 避難開始	
2 時間 前	☐ 避難終了	☐ 避難完了を共有(災害用伝言ダイヤル171等)	☐ 避難完了を共有(災害用伝言ダイヤル171等)	
	L4 避難勧告・避難指示			
L5 氾濫発生				
※ ☐ にチェックがつかない場合は、誰が実施するのか決めておくこと				

図-3 マイ・タイムライン（個別避難計画） 出典：倉敷市ホームページ

（２）町のマイルール “黄色いタスキ大作戦”

真備町の川辺地区は、周囲を川に挟まれた地形であり、ほぼ全域が浸水したことから、一旦大半の住民が地区外へ転居せざるを得ず、それにより町内会やまちづくり協議会といった地縁団体を中心とした活動の継続が難しい状況でした。

このような状況のなか、住民有志の団体「川辺みらいミーティング」が立ち上がり、現在では地域の防災活動の中心的な役割を担っています。

みらいミーティングでは、被災当時の避難行動の振り返りやマイ避難先の啓発、防災まち歩き・マップ作成など、町内会所属の有無にとらわれず、全ての川辺地区住民を対象に活動を行っています。

なかでも復興に関する象徴的な取り組みとして「黄色いタスキ大作戦」があります 2)。これは、安否確認手段として

「目指そう！逃げ遅れゼロの川辺地区/無事です」と印刷された黄色いタスキを玄関先に掲げる取り組みです。

昨年実施した訓練では、実に全住民の約 7 割あたる 882 軒が訓練に参加しました。

私も訓練に参加させていただき、偶然に高齢単身女性宅へ隣人女性が声をかけていらっしやる場面に出会いました。そこでは、以下のようなやりとりがなされていました。

「奥さん、今日は防災訓練じゃけえ、
このタスキを玄関に結ぶんよ。
そうしたら奥さんが大丈夫かどうかわかるけえ。
災害のとき、このタスキが掲げて無かったら
地域の人が助けに来てくれるけえね。」



写真 1 黄色いタスキ大作戦の様子（実行委員会提供）

～ プライバシーの壁を超える ～

とかく昨今では、各家庭や個人的な情報の取り扱いに配慮が必要となり、災害時の避難支援にも大きな壁となっています。要配慮の情報を平常時は誰が管理するのか、災害時にどんな内容まで、誰まで知らせるのか、など支援に支障となる困難はたくさんあります。

もちろん、プライバシーは個人や家庭の尊厳や安全を守る上で非常に重要ですが、あまりに一線を画し過ぎると他者とのつながりの質を下げてしまうことが心配されます。

また、避難支援についても、「〇〇さんが必ず△△さんを助けに行く」といった唯一の解しかない状態では、冗長性に欠け、臨機応変な対応が困難です。

要配慮者マイ・タイムラインは、ご本人、家族、近所、福祉事業者等といった 4 つの属性が警戒レベルに応じた対応

行動を事前に様式に記入し、関係者で共有しておくもので、このタイムラインそのものがプライバシーのグラデーションを彩る媒体となっています。

～ 遠慮の壁・期待の壁を柔和させる ～

黄色いタスキによる安否確認手法にも、様々な機能がみえます。

第一は、遠慮の壁、期待の壁を柔和させる機能です。

災害時の安否確認は、平時から関係性が構築されていれば直接の声掛けがしやすいものの、そうでない場合は「急に訪問して不審に思われるのではないかな」「きっと避難しているはず」といった様々な“**声掛けできない・しなくてもよい理由**”が浮かびます。

そこに「無事です」と印字された黄色いタスキを玄関に掲げることで、もし掲げていなかった場合に「タスキが掲げてなか

ったのですが大丈夫ですか？」といった声掛けがしやすいです。まさに、遠慮の壁、期待の壁を柔和させ、支援のものを防ぐ効果が期待されます。これは要配慮者マイ・タイムラインも同じです。

～ 非日常行動（訓練）のしやすさ ～

第二は、日常にありながら非日常の行動をしやすくする機能です。訓練が必要だということは誰しもわかっていることですが、災害が起きていない状態では心理的・時間的障害があります。多くの防災訓練は決められた日時に決められた通りの行動（例えば、日曜日の9時に災害が発生したとして、9時半には小学校に避難してくださいなど）を求められ、参加するハードルが上がります。

黄色いタスキ大作戦は、指定日のある時間帯までに玄関にタスキを掲げるだけで、誰でもいつでも訓練に参加できるのです。

おわりに

過去の災害の教訓をふまえて防災対策が高度化すればするほど、私達の生活で災害を肌で感じる機会も減少していきます。

しかし、昨今の気候変動の影響により極端気象による被害が多発し、災害に対する備えのあり方や住み続けられる社会のあり方にも変化が求められているのではないのでしょうか。

本稿で紹介した避難機能付き共同住宅は、浸水リスクと共存し、日常と非日常双方を行き来する空間となっています。安全か危険かの2元論ではなく、危険であることを知り、安全と危険の間をつなぐ選択肢を日常空間の中にどれだけ多様に用意することができるのかが、不確実性の高い災害発生リスク環境下における社会には重要な視点です。

豊かな社会関係資本も欠かせないものです。要配慮者マイ・タイムラインや黄色いタスキ大作戦には、豊かな社会関係資本の構築に十分なきっかけを与え、共助機能を想起させ、災害による被害の軽減に多大な効果をもたらすことが期待されます。

今後発生が懸念されている南海トラフ地震や首都直下地震、極端気象による自然災害リスクは常に私達の生活にあるものの、with コロナの生活様式と同じように with 災害、with 防災の生活様式、まちづくりがなされているでしょうか。

そのありようのヒントが「グラデーション」にあります。グラデーションを彩る多様な選択肢が備わる社会が期待されます。

磯打千雅子（香川大学地域強靱化研究センター）

<参考文献>

- 1) 磯打千雅子・津田由起子・野々村敦子：水害ハイリスク地域における地区防災計画制度の発展的活用の提案－，土木学会論文集 F6（安全問題）75 巻（2019）2 号
- 2) 室崎益輝他：地区防災計画学の基礎と実践，弘文堂，2022 年 03 月刊

倉敷市ホームページ

<https://www.city.kurashiki.okayama.jp/36774.htm>



オールジャパンでレジリエンスを推進する 国土強靱化貢献団体認証

はじめに

世界的な新型コロナウイルス感染症の拡大は、社会に大きなダメージを与えており、日本も例外ではありません。そうだけでなく自然災害が多く発生する我が国は、災害発生時に迅速に回復できる経済社会システムの構築が必須です。

日本をよりレジリエンスにするためには、公的インフラ等のハード面の整備だけでなく、企業や団体の組織体制づくり等のソフト面での取組みも欠かせません。このソフト面を評価し認証する「国土強靱化貢献団体認証（以下、「レジリエンス認証」）」を紹介いたします。

1. レジリエンス認証の概要

2016年、内閣官房国土強靱化推進室（以下、「強靱化推進室」）は、大規模な災害発生等への備えとして事業継続に関する取組みを積極的に行う団体を認証する「レジリエンス認証」を創設しました。

レジリエンス認証は、事業継続（自助）を認証取得した

団体が、社会貢献（共助）の認証取得もしています。2022年3月末現在、事業継続（自助）は257団体、そのうち社会貢献（共助）は156団体が取得し、事業継続と社会貢献に取り組んでいます。

一般社団法人レジリエンスジャパン推進協議会（以下、「協議会」）が認証組織となり、ガイドラインに基づいて認証を行い、認証取得団体は強靱化推進室および協議会のホームページで公表され、金融機関等の融資の優遇が受けられます（詳細は、5.レジリエンス認証取得によるメリットを参照）。



内閣官房国土強靱化推進室
認証団体公開ホームページ

レジリエンスジャパン推進協議会
レジリエンス認証ホームページ

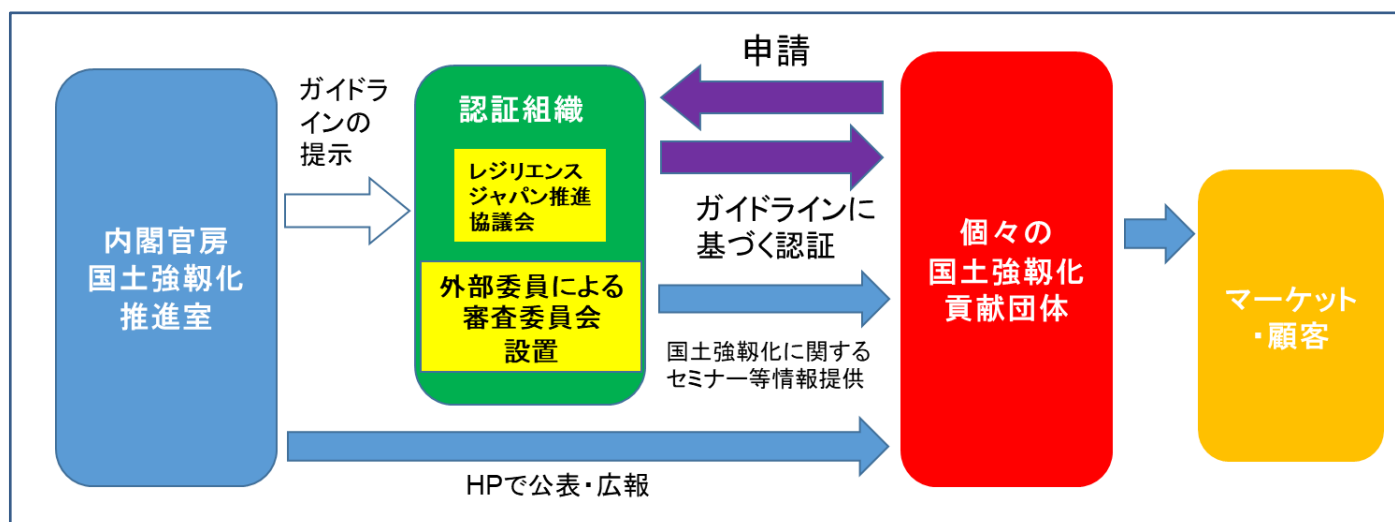


図 1. レジリエンス認証制度の仕組み

2. レジリエンス認証の取得方法

レジリエンス認証の取得方法は、まず協議会のホームページより申請書をダウンロードし、必要事項を記入して申請します。申請後、一次審査（書類）、二次審査（面

接）を経て、認証審査委員会で適合・不適合が決まります。二次審査は、現在はすべてオンラインにより実施しており、全国どこからでも受けられます。

3. 認証組織の役割

認証組織では事務局を設置し、制度運営に係わる「制度運営委員会」と認証審査に係わる「認証審査委員会」

を立ち上げています。各委員会の委員は外部の専門家を選定し、広範かつ多くの委員が審査することで、認証の透明性を高めています。（図2参照）

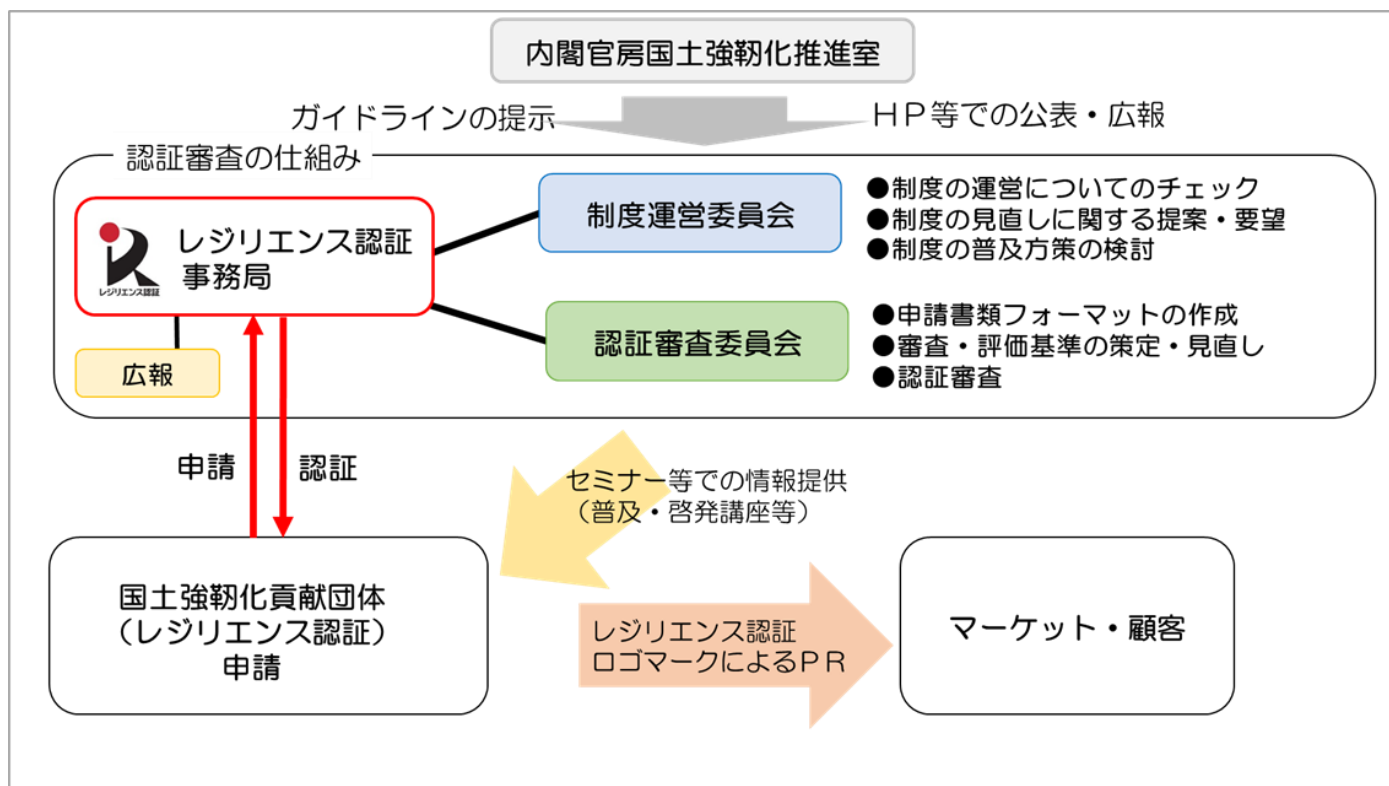


図2.レジリエンス認証制度のフレームワーク

4. レジリエンス認証は2年更新

この制度は2年ごとに更新を行います。事業継続に関する取り組みはマネジメントを回すことが重要ですが、更新することでマネジメントの見直しにもつながり、その仕組みにも認証制度は合致しています。

更新手続きは2年間の取組みについて経営者のコメントを元に進められ、審査の内容も簡便になっています。

(2) 様々な信用の向上

認証の2年更新により、一過性ではなく継続した取り組みができ、様々な信用が高まることでのメリットがあります。

- ① 経営者・社員の事業継続に関する意識の向上による、顧客や市場に対する信用の獲得。
- ② 安心して働ける企業としての雇用の確保。
- ③ 社会・金融機関に対する与信の向上。

5. 認証取得によるメリット

(1) 専門家による取組み評価

専門家による客観的な評価と指摘事項への取り組みを実施することで以下のようなメリットがあります。

- ① より良い事前の備えが可能となる。
- ② 業務見直しによる企業体質の強化。
- ③ 会社全体の企業力強化・事業承継につながる。

(3) レジリエンス認証ロゴマークによるPR

名刺や広告等に付して自社の事業継続や社会貢献への積極的な姿勢を、顧客や市場に対してPRすることができます。（但し、医療法等他の法令で制限されているものは除きます。）

- ① ロゴマーク使用によるPR
- ② 公的機関（強靱化推進室、協議会）ホームページ公表による信用力の向上

(4) 他認定との連携

関東地方整備局管内の建設会社は、追加の書類を提示することにより、関東地方整備局「建設会社における災害時の事業継続力（企業BCP）認定」を合わせて受けることができます。

(5) 金融機関による融資

当認証を取得することで、日本政策金融公庫のBCP融資（社会環境対応施設整備資金）についての要件確認証が発行されます。これは、事業継続ならびに防災目的の施設等の整備を実施する主に中小事業者に行っている融資制度です。

主な融資制度

- ① 紀陽銀行「ビジネスレジリエンス対策ローン」
- ② 第三銀行「事業継続サポートローン」
- ③ 静岡信用保証協会「BC 特別保証」
- ④ 兵庫県信用保証協会災害時発動型予約保証システム「そなえ」
- ⑤ 鹿児島県信用保証協会 BCP サポート保証「あんしん」

6. おわりに

このように、レジリエンス認証を取得することはメリットが多いのが特徴です。あらゆる状況に対応できる事業継続計画書を作成し、マネジメントを回すことにより認証されることで社会全体に対し、信用力が増すことが期待されます。また、就業者の安心感にもつながります。

ぜひ多くの団体に事業継続（自助）ならびに社会貢献（共助）について取り組みを行い、レジリエンス認証を取得され、オールジャパンで日本のレジリエンスを実現したいと思います。

荒井富美雄 （一社）レジリエンスジャパン推進協議会

レジリエンスに触れる 書籍紹介 ～おすすめの1冊～



「レジリエンス」

ハーバード・ビジネス・レビュー編集部 ダイモンド社 2019年11月

ハーバード・ビジネス・レビューに掲載されたレジリエンスに関する記事9編を集めた1冊だ。内容は、心理的なレジリエンスだが、有事の際にメンバーの心理的な強さやその状態下でBCPを発動して動けるかどうか、担当者の心理的なレジリエンスを意識して読むこともできる。

執筆者は全員海外の著名な研究者だが、日本語版に寄せて、豊橋技術科学大学情報・知能工学系教授 岡田美智男氏が解説を書かれている。心理学者ではない岡田氏のレジリエンスは、目新しい視点を提供しており、翻訳物は苦手と言う方も、巻頭の解説は一読をお勧めする。

レジリエンスは関係性のなかに宿る（解説）

ロボット工学が専門の岡田氏は、「作りこみ過ぎずシンプルな方がレジリエンスだ」と言っている。二足歩行のアシモも、動作を作りこまず半ば地面に委ねてしまおうという、シンプルなアイデアだったとか。自分の弱さを認め、さらけ出すことで、環境に委ね、周囲の助けを借りるという発想が生まれている。

レジリエンスは自己の強さだけではなく、弱さによって他との関係性をつくることができれば、それも結果的には強さになりうるというわけだ。

例えば、壁にぶつかって方向を変えるお掃除ロボットは、壁を障害物ではなく、方向転換をするための味方だと捉えることで、方向転換の動力が節約できている。ぶつかれば曲がればよいという楽観性、障害物すらあるものは利用するというブリコラージュ、難しく考えないで前に進む愚直さ、これらがロボットのレジリエンスを創り出している。案外レジリエンスはそんなものかもしれない。このあたりは、「弱いロボット」という岡田氏の著書も参考になる。

2019年11月、この本の発刊記念イベントで岡田氏は「相手が入ってこれるすき間をつくるのが大事」と言っている。レジリエンスには、相手を受け入れるゆとりや寛容さも必要であり、災害発生時に限らず、平時でも他者の助けを借りられる方がダメージは少ないと捉えられる。

つまり、自己で完結させるのではなく、依存先を増やして分散させることもレジリエンスであり、選択肢の多さと自由度、環境の変化さえも味方につける「したたかさ」もレジリエンスというわけだ。このあたりは、BCPを策定や見直しの参考にもなりそうだ。

深谷純子（株式会社深谷レジリエンス研究所）

発行：一般社団法人レジリエンス協会
メール：info@resilience-japan.org

Resilience View編集部
ホームページ：<https://resilience-japan.org/>